



日本スピッツの歩様(ほよう)について

犬種に関係なく、動き回る犬達を見るのは、ついでに我を忘れて見とれてしまいます。また、立ち止まって前方を見据える表情には、筆舌では表現出来ない美しさがあります。この観る人を感動させる美しい姿は、動きの中から生み出されてまいります。

ドッグショーでは歩様の審査があります。この審査から審査員は何を得ようとしているのか正しく理解して戴く必要があります。視審・触審で当該個体から得た情報を再確認するためであることはもちろん、前述した表情を歩様審査の中から捨い出す重要な作業で、単に歩行の上手下手を採点しているのではありません。

犬達の先祖は野生で暮らし、多くの野生動物の中で懸命に生き抜いて来ました。生存競争の激しい世界で生を得ること自体、想像以上の厳しさがあったはずで、野生では多くの天敵が存在します。それらの外敵より身を護ること、獲物を追って狩りをするにも知恵はもちろん、より速く走る運動性能は、総ての生き物に必要な要素だったのでしょう。

犬の審査の底流にはそのような健全度が存在します。その健全度の一つの基本は骨格構成で、優れた骨格構成より美しい動作が生まれます。歩様良好の個体は優れた骨格構成を示していますが、優れた構成であれば良好な歩様が約束されるとは限りません。頂点を極めたスポーツ選手であっても、生まれ持った天性にトレーニングを積んだうへの栄光です。

最近フリスビー・ドッグが流行してまいりました。多くの大種はボーダーコリーで、彼等の適度のサイズと生まれ持った天性は、さすが牧羊犬と感心した次第。しかし、その中に有って小型犬達も参加しておりました。例えば、ウェルシュコーギーですが、トレーナーの肩を利用して2mにも達するボーダーコリーには、高さでは到底及びません。しかし、コーギーの地上50cm程度のディスク・キャッチであっても動くものの美しさは存分に伝わってまいりました。

また日本スピッツの場合、白く長い被毛をなびかせて走り、ディスクを先回りしてジャンプしキャッチするのですが、走る姿もディスクキャッチの瞬間も美しい被毛と連繋して華麗であり、観客を魅了

する要素を十分に備えた犬種で有ることを、あらためて認識させられました。これらフリスビー犬の多くは、通常のドッグショーに上位入賞する犬種特徴を備えているとは限りません。しかし運動性能においては総てに素晴らしいものを感じました。

ここで感じた事柄を申し述べますが、形質を競う通常のドッグショーが開催される様になって定められた標準書により審査が行なわれる事により、同一犬種では同一規格に近づきつつ有るようです。必然的に個体としての個性・特徴を失うこととなり、遺伝性の異常を招くこととなります。以前より云われているジャーマン・シェパードが股関節・膝関節脱臼を起こしやすいのも、繁殖過程で同一タイプに指向する結果と考えます。また、日本スピッツもスウェーデンでは関節異常が重要関心事の一つとされ、種犬の少なさから来ず現象と心配しております。

本題に戻りますが、犬種、用途別、つまり大別して使役犬と愛玩犬では歩様審査の比重が異なります。しかし、健全度はあくまでも底流に存在します。それは総てに運動性能が要求されるからです。使役犬であっても愛玩傾向で飼育している家庭も多いようです。日本スピッツは多用途犬ですが、家庭内に有っては愛玩指向の伴侶犬で、彼等の天性である頭の良さ、その他長所はあらためて愛好家の前では言を要しません。

このように、ほぼオールマイティとも言える愛すべき日本スピッツを、より楽しく家族とともに過ごせる事の出来るのは、わずかな我慢を教え、喜びを味わえるトレーニングも必要と考えます。そのうへ日本スピッツの歴史の中で現在は一過程にしか過ぎません。繁殖面においても、余裕の有る繁殖環境を残しながら次代にお渡しして行く責務は当然であると存じます。

「犬には何一つ欠点はない。強いて探せば寿命の短いことである」と、かのムツゴロウ王国の畑氏の名言です。この短い生涯を楽しく健丈に送らせてあげるのは、ともに楽しんで私達の努めであり、彼等へのせめてもの恩返しの一つと考えます。

柴 稗 (NSC会長)

(第2回NSC展覧会配布 2002/11/10)